

6日目 三島 -> 沼津 -> 原 -> 吉原

寒い間は休んでいた東海道ウォーキングを4月3日に再開、三島駅を7時半にスタート。
三島駅から、白滝公園を経ての綺麗な水路沿いの水上通りを歩く、水辺の道には多くの作家や歌人の句碑があり、早朝で誰も居ず、静かで趣きがあるが、まずは本日のスタート地点である三島大社へ急ぐ。

三島宿 11番目

境内はピンクの枝垂れと白の桜が見事で、早朝にもかかわらず大勢のカメラマンがいて良いアングルの位置には三脚だらけ。源頼朝が源氏再興を祈願した神社とのことで歴史が感じられ、境内には幹周/約4m、樹高/10m以上、推定樹齢/1200年の巨大な金木犀があり、天然記念物となっている。さぞ強い匂いだらうな。

天然記念物の金木犀



三島大社の桜



つるべっこ

三島大社を出て旧東海道をたどる。街角に面白いものを見つけて写真。井戸の上に人形を置いたもので「つるべっこ」と名づけられ、美味しい水が飲めるとのこと、試飲はせず。

「つるべっこ」の人形の顔が昔見た誰かの漫画に似ていて面白かったが、どんな漫画だったのか、作家は誰だったのかは思い出せず。

三島は富士の湧き水の豊富なところで、小川・水路が多く、しかも水が綺麗、水鳥も浮かび、ゆっくりと時間を過ごすには良いところに見える。

昔の用水路として有名な「千貫樋」を見るがコンクリート製では写真を撮る気にもならない。

つるべっこ



次の名所は対面石で、長沢八幡宮の奥にあり、源頼朝が挙兵した時に奥州から駆けつけた源義経が兄頼朝と対面した時に座ったとの言い伝えのあるもの。

対面石の説明



対面石

対面石
 所在 清水町八幡 八幡神社境内
 治承四年(一一八〇年)十月、平家の軍勢が富士川の辺りまで押し寄せてきた時、鎌倉にあった源頼朝はこの地に出陣した。たまたま、奥州から駆けつけた弟の義経と対面し、源氏再興の苦心を語り合い、懐旧の涙にくれたという。
 この対面の時、兄弟が腰かけた二つの石を対面石という。
 またこの時、頼朝が柿の実を食べようとしたところ、洪柿であったのでねじってかたわらに捨てた。すると、後に芽を出し二本の立派な柿の木に成長し、この二本は幹をからませねじりあっていたので、いつしかねじり柿と土地の人は呼ぶようになった。
 清水町教育委員会

三島市街地を外れて一路沼津へ、三島—沼津間は一時間弱と近い。進行方向右手、つまり北側は雲が多く富士山は全く見えず。

川廓の説明



川廓の由来

川廓町は志多町と上土町との間の東海道往還治いにあって東側は狩野川に接し、背後は沼津城の外廓に接した狭い町であった。

「川廓」は「川曲輪」とも記し、狩野川に面した城廓に由来して名付けられたものと考えられる。

沼津宿 12番目

黄瀬川を渡り狩野川沿いに歩いて沼津市街地に到着、川廓町を通り抜ける。

この川廓は沼津城の狩野川に面した外郭をなした地域であったとのこと、但し通り沿いは新しい建物のみ。

沼津の市街地を通り抜けて千本松原へ寄り道。千本松原の近くに我が故郷の歌人若山牧水が晩年を当地に居住したとのこと若山牧水記念館があり、そこを見学するのが目的。

牧水記念館のある通りは「文学の道」の標識があり、先を急ぐ身でなければゆっくりと見て歩きたいところ。入場料は200円也を支払い、記念館を見学。牧水記念館の近辺には大きなお屋敷が多く、立派な庭もあり、何となく有名人の家では?との雰囲気のある邸宅もあり、その中に面白い枝ぶりの松の木を見つけ、思わず写真。

牧水記念館停留所と文学の道標識



面白い形の枝ぶりの松の木



千本松原

記念館見学後は文学の道を引き返して千本松原へ、お目当ては牧水の石碑、もちろん

「幾山河こえさりゆかばさびしさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく」、もっとも、この歌自身は岡山県哲西町で歌ったものだそう。

千本松原の中に他にも文学碑が沢山あるとのこと、しかし既に充分道草を食っているの、急いで旧東海道に逆戻り。

道は沼津宿から原宿へ。

特に名所の無い道をひたすら歩く。

途中に、沼津藩の境界の石塚あり。

更に行くと、松蔭寺があり、白隠

禅師の産湯の井戸があった。

この白隠禅師とは江戸時代に臨済宗の名僧として有名であったとのこと。

白隠禅師産湯の井戸



牧水の歌碑

白隠禅師の説明

宿

白隠禅師誕生地

駿河には過ぎたるものが二つあり 富士のお山に原の白隠”と歌われ 臨済禅中興の祖と仰がれる白隠禅師は 西暦1685年12月25日 長澤宗彝(そうい)を父 妙遊(みょうじゆん)を母とし三男二女の末子として生まれる。15才の時松蔭寺の単嶺祖伝和尚を師として自ら望んで出家し仏門に入る。19才から32才まで修行行脚で全国を巡り33才で松蔭寺住職となり81才で亡くなるまで松蔭寺を中心に全国各地で真の禅宗の教えを広めた。毛筆の書画に秀でて遠磨図や観音菩薩絵は特に有名である。現地は母妙遊(みょうじゆん)の生家屋号味噌屋(みそや)の地でのち父宗彝(そうい)が分家して沢瀉屋(おもだかや)を名乗った跡地である。禅師が生まれた時使用した『産湯の井戸』がこの奥にいまなお清水を湛えている。

原宿 13番目

11時半頃に原に到着、朝食を食べたのは5時前でかなり空腹、飲食店を探したが30分程歩くあいだ旧東海道には一軒もなく、やむを得ず右折して市街地へ寄り道。魚屋さんの前を通り、本日は魚を食べようと思い、レストランを探すが、ラーメン屋さんばかり、その寄り道の途中に、沼川の名の小さな川沿いに桜並木が続いている場所があり上流から下流まで見える範囲は小ぶりながら桜々、ここの桜は別名白隠桜と言うそうで、花見の家族連れで賑わっていた。ベンチに座って弁当を食べている人も多く、弁当で良いかと考えたが、同じことを考える人も多いらしく、近くの「ホットモット」は長蛇の列。弁当もあきらめて中華料理のレストランに入り本日の昼食は中華丼と餃子で空腹を満たす。

原の沼川沿いの桜



原の火消し

同じく原で面白いものを発見、消防署のガレージのシャッターに火消しの絵、思わず写真。原から吉原へウォーキング再開。午前中は曇り勝ちであったが、昼からは青空の方が多くなり、気温も急上昇、服を1枚脱いでも暑い。

富士山

右に富士山を見ながら黙々と歩き続けるが、常にどこかに雲があり、雲の薄着を脱ぐ様子が全くない。人家の途絶えたところや空き地で富士山の写真を撮ろうと何度も立ち止まるも、特に頂上部分の雲は離れることはなく、付近に雲は無いのに富士山の回りにだけ雲があるのも不思議。

望嶽碑



消防署のシャッターの火消し



道路が少し高台になると、富士の裾野の広がり眺められ、雲さえなければ富士撮影には絶好の地。地名表示には田子の浦とあり、左手に時々見える松原は多分万葉の歌人に「田子の浦に打ち出でてみれば・・・」と詠まれた名勝田子の浦の浜。心引かれながら寄り道は断念。

道路の右側に立円寺があり、その庭に「望嶽碑」がある。この付近が富士展望の地であることから江戸時代に建立されたものとのこと。

山頂は隠れている



山頂が顔をのぞかせているが山腹は見えず



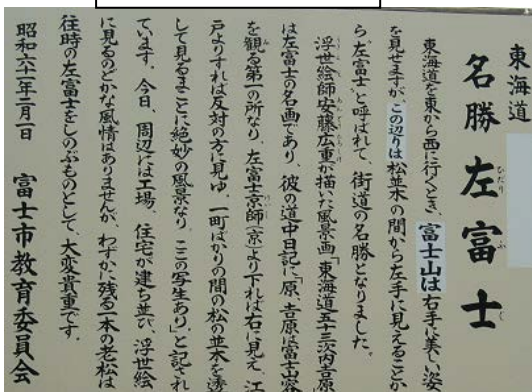
日本製紙の煙突



富士市の煙突

やがて、「富士市」の道路標識、この辺は既に吉原宿。
新幹線の車窓から見ていると、真正面に富士山が見える位置の新富士駅近辺では、赤白まだらの何本かの大きな煙突とその煙突から出る煙が常に視界の中にある。
その煙突の一つは日本製紙工業のもので、直ぐ近くを歩いたので、これがいつも見ている煙突と記念に写真。

左富士の案内



新幹線のガード下をくぐって道は北上して右カーブ、今迄右手に見えていた富士が左側に見える「左富士」の名所となり、左富士神社まであるが雲が増えてきて富士山は輪郭も見えない。

平家越えの碑、石碑の表面が滑らかで反射が多く写真写りが悪い



平家越え

更に歩くと、和田川があり、その橋のたもとに「平家越えの碑」がある。この地は、源平の戦いで、飛び立った水鳥の羽音を敵襲と間違えて戦わずに逃げ出した平家の大軍の陣取っていた場所とのこと。

吉原宿 14 番目

橋を渡ると吉原の市街地。市街地を通り抜けて、旧東海道としては吉原宿と蒲原宿の間にある富士駅に16時に到着、本日の歩いた距離は約35Kmで5.4万歩。

予定では蒲原まで歩くつもりだったが、足裏にできたマメが痛くなりタオル。

4ヶ月のブランクで足裏が薄くなった模様。鍛えなくっちゃ。

次回は吉原 -> 蒲原 -> 由比 -> 興津 -> 府中 を予定

6日目

